

源氏物語全

今泉忠義
森昇一編
岡崎正繼

源氏物語

全

源氏物語

昭和52年1月20日 初版発行
平成4年12月10日 重版発行

定価は函に表示してあります。

編 者	いま 今 もり 森 岡	いずみ 泉 ざき 崎 鳥	ただ 忠 しろう 昇 まさ 正 勝	よし 義 いち つぐ 繼 幸 刷
発 行 者	飛	鳥	勝	幸
印 刷 所	三	恵	印	刷

発 行 所 株 式 会 社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町1-3-1
(郵便番号)101(振替)東京6-18020
(電話番号) 東京03-3295-8771

Printed in Japan
(著者検印は省略いたしました)
ISBN4-273-00853-X

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合
は、おとりかえいたします。

凡 例

一、本書は、青表紙本系の版本中では最善本と稱せられる首書源氏物語（釋了眞著、寛永十七年跋・寛文十三年刊）の本文を底本とした。

一、本書は、讀解の便を考慮し、左の諸點について手を加へた。

1 段落を分けるために、改行を行つた。

2 底本の句讀點に拘泥せず、句讀點を附した。

3 會話文に引用符を附し、會話主を小字（6ポイント活字）で示した。

4 假名遣を歴史的假名遣に統一した。

5 適宜、送假名を加へた。但し、その場合は、私に加へた送假名の右傍に*印を附して、他の送假名と區別した。

6 假名を、適宜、漢字に改めた。但し、その場合は、元の假名を振假名として残した。

7 踊字を、適宜、他の表記に改めた。但し、その場合は、元の踊字を右傍に残した。

8 漢字を、適宜、假名に改めた。また、宛字などを適當な漢字表記に改めた。但し、その場合は、ともに元の漢字を振漢字として残した。

9 底本に稀に存する振假名は、へで圍んで、他の振假名と區別した。

10 編者が稀に私に振つた振假名は、()で圍んで、他の振假名と區別した。

11 底本には異本を本文に採り入れた部分が稀にあるが、本書では、その部分の左傍に傍線を附し、イと註記して、他の部分との區別を明かにした。

12 清濁は、底本の全體を調査して得たものを基盤とし、できるだけ源氏物語成立時の清濁に近づけることに努めた。

一、本書は、研究者の便を考慮して、池田龜鑑著「源氏物語大成」校異篇（中央公論社刊）の本文との對校を行ひ、異つてゐる部分については、本文の右傍に・印を附し、その部分の校異を脚註に○印を附して示した。また、「源氏物語大成」校異篇の頁數を本文の下に漢數字で添へ、その各頁の1行・5行・10行の行頭に相當する部分にそれぞれ「・5」「10」の符號を添へた。但し、卷頭には「の符號を附さないこととした。

一、本書の脚註欄には、左のやうなものを載せた。

1 ○印を附したもの——本書の本文と「源氏物語大成」校異篇の本文との校異を示す。但し、撥音を表すと目される「ん」「む」相互の相違は、校異の對象から外した。

例

首書・大成

本書本文

本書脚註

たへがたう（首書）

たえかたく（大成）

いにしへびと（首書）

いにしへの人（大成）

まさなき事とも（首書）

まさなきことも（大成）

給ければ（首書）

給へりければ（大成）

堪^たへがたう

○う——く

いにしへびと

○へ——への

まさなき事ども

○ど——ナシ

給[・]ひ^{*}ければ

○給——給へり

2

☆印を附したのもの——引用の詩歌およびその出典、本文の清濁の註記、本文の読み方の参考となるものなどを示す。なほ、「☆過し——すくし」「☆煙——けふり」などのやうに實線で結んだものの下部（すくし）「けふり」などは、「源氏物語大成」校異篇の本文の形を参考のために示したものである。

昭和五十年三月

語の清濁について

本書における語の清濁は、類聚名義抄（平安時代末期成）や平曲（鎌倉時代の清濁を繼承するもの）などに見られる語の清濁（以下、古形と呼ぶ）と首書源氏物語に見られる語の清濁とを比較して得た次のやうな事實に基き、源氏物語成立時の語の清濁に近いと考へられるものを採用することに努めた。

一、古形の清んでゐるものの多くは、首書でも清んでゐる。

例 みづかき→みづかき 《参考》 瑞籬^{ミツカキ}（観智院本類聚名義抄） 端垣^{ミツカキ}（曆

仁本古語拾遺・鎌倉初期成） みづかき（首書） Mizugaki^{ミツガキ}（日葡辞書・一六

〇三年成・翌年補遺） みづがき（湖月抄・一六七三年成）

類例 あはたやま・うちき・おほいとのおほいまうちきみ・おほち・おぼろけなり・か

かやく・かしこまし・かへすかへす・からきぬ・からころも・こたま、など

二、古形の清んでゐるものの中の内くらかが、首書では濁つてゐる。

例 ふせく→ふせぐ 《参考》 防^{フセク}（圖書寮本類聚名義抄） 防^{スム}く（平曲）ふせぐ（首書）

Fusegui, u, eida^{フセグ}（日葡辞書）

類例 いきずたま・いちしるし・ささやかなり・そばたつ・たむ、など

三、古形の濁つてゐるものの多くは、首書でも濁つてゐる。

例 まだたく→まだたく 《参考》 瞬マタ、ク（高山寺本類聚名義抄） まだたく（首書）

Matatagi（マタタギ）（日葡辭書） まだたく（湖月抄）

類例 おいぼふし・おとしあぶす・かはぼり・きらぎらし・さいつごろ、など

四、古形の濁つてゐるものが、稀に首書で清んでゐる。

例 わくらばに→わくらはに 《参考》 和久良婆爾（萬葉集） ワクラハニ（毘沙門堂本）

古今集注） わくらはに（首書） Vacurana（ワクラワン）（日葡辭書）

類例 うたがた

さて、右の一、四の傾向から見て、古形を認定するための確證の得られない場合でも、首書で清んでゐる語は古形も清んだ形のものであつた、と認めても略誤りはないといふことができるであらう。一方、右の二、三の事實から見て、首書で濁つてゐるものの古形を確證のないままで推定するのは、困難でもあり、また誤りを犯す危険を伴ふことにもなるであらう。随つて、本書の脚註の註記は、右の事情を勸案の上で参考に使われることが望ましいといふことになる。

本書の採用した清濁は、古色を多くとどめる首書源氏物語の清濁を基盤としたものであるところから言つても、尠くとも従來の諸書よりは幾分か源氏物語成立時の清濁の形に近づくことができたのではないかと思ふ次第である。

目次

凡例
語の清濁について

明	須	花	賢	葵	花	紅	末	若	夕	空	帚	桐
石	磨	散 里	木		宴	葉 賀	摘 花	紫	顔	蟬	木	壺
.....												
二七三	二四三	三九	一〇五	一七三	一五	一四	一三	九	五	五	九	一

野 簞 常 螢 胡 初 玉 少 朝 薄 松 繪 關 蓬 滯

分 火 夏 蝶 音 鬢 女 顏 雲 風 合 屋 生 標

五五

五二

五五

四九

四七

四七

四九

四五

元一

三七

三七

三三

三九

三三

四一

五

源氏物語全

桐 壺

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬがす

5

ぐれて時めき給ふありけり。はじめより、我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。おなじ程、それより下藤の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕につけても、人の心をうごかし、恨を負ふつもりにや有りけん、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、

いよく飽かずあはれなるものにおほ、して、人の謗をもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目をそばめつ、いと眩き人の御おぼえなり。唐土に

も、かゝる事の起にこそ世も亂れ惡しかりけりと、やうく天の下にもあぢきなう、人のもて惱みぐ

さになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきを頼にて、交らひ給ふ。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへびとの由有

10

るにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をももて

なし給ひけれど、とりたててはかぐしき御後見しなければ、事有る時は、猶據所なく心細げなり。

前の世にも御契りやふか、りけん、世になく清らなる玉の男御子さへむまれ給ひぬ。いつしかと心

もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覽するに、めづらかなる兒の御かたちなり。一の御子は右大臣

15

1 桐 壺

五

○を——をのみ

○ほ、——もほ
☆「おほ、し」／＼「ほ」、
首書清ム。

○う——く

○へ——への

○も——もいたう

六
○御——ナシ

○む——う

5

の女御の御腹にて、よせおもく、疑なき儲の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂にはならび給ふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば私物におほ、しかしづき給ふ事限なし。はじめより、おしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊の折、何事にも故ある事のふしには、まづ参う上らせ給ふ。ある時には大殿籠り過して、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕き方にも見えしを、この御子むまれ給ひて後は、いと心ことに思しおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子の居給ふべきなめりと、一の御子の女御は思し疑へり。人より先に参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、此の御方の御いさめをのみぞ、なほ煩はしう思ひ聞えさせ給ひける。畏き御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、我が身はか弱く、物はかなき有様に、なか／＼なる物思をぞし給ふ。

10

御局は桐壺なり。あまたの御方／＼を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前渡りに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。参う上り給ふにも、あまりうちしきる折／＼は、打橋、渡殿、ここかしこの道に、あやしきわざをしつゝ、御送迎の人の衣の裾堪へがたう、まさなき事ども有り。又ある時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いと哀れと御覽

15

○ほ、——もほ

☆過し——すくし

○む——う

セ

○つ、——て

○殿——との、

○う——く

○ど——ナシ

○は——には

じて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司をほかに移させ給ひて、上局に賜はす。その恨、ましてやらん方なし。

この御子、三つになり給ふ年、御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず、内藏寮、納殿の物をつくして、いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世の謗のみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御かたち心ばへ、有りがたくめづらしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず、ものの心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、まかでなんとし給ふを、暇さらに許させ給はず。年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、帝「なほ暫し試みよ」と宣はするに、日々におもりに給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣くく奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折にも、

あるまじき恥もこそと、心づかひして、御子をばとゞめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限あれば、さのみもとゞめさせ給はず、御覽じだに送らぬおぼつかなさ、いふかたなくおぼさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いと哀れと物を思ひしみながら、言に出でも聞えやらず、あるかなきかに消え入りつ、物し給ふを御覽するに、來し方行く末思召されず、よろづの事を泣くな¹⁰く契り宣はすれど、御答もえ聞え給はず。まみなどい¹⁵とたゆげにて、いとゞなよなよと、我かの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思召し惑はる。輦車の宣旨など宣はせても、又入らせ給ひては、さらにえ許させ給はず。帝「限あらん道にも、後れ先だ、じと契らせ給ひけるを、さりとともうち捨て

☆「さうじ」ノ清濁、首書ノママ。

☆「およすけ」ノ「す」、首書清ム。

〇と——とのみ

〇ぼ——もほ

〇〇
は——ナシ
ナシ

ては、え行きやらじ」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

更衣「限とて別る、道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」

いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事は有りげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならんを御覧じ果てん、と思召すに、人々「今日始むべき祈禱ども、さるべき人々承れる、今夜より」と聞え急がせば、わりなく思しながら、まかでさせ給ひつ。御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御足の行きかふ程もなきに、

なほいふせさを限なく宣はせつるを、里人「夜中うち過ぐる程になん絶え果て給ひぬる」とて泣き

騒げば、御使もいとあへなくて歸り参りぬ。聞召す御心惑ひ、何事も思召しわかれず、籠りおはしま

す。御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ、例なき事なれば、まかで

給ひなんとす。何事かあらんともおもほしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御泪の隙なく流

れおはしますを、あやしと見奉り給へるを、よろしき事にだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざな

るを、まして哀にいふかひなし。

限あれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、「おなじ煙にも上りなん」と泣きこがれ給ひて、御

送の女房の車にしたひ乗り給ひて、愛宕と云ふ所に、いとかめしうその作法したるに、おはしつき

たる心地、いかばかりかは有りけん。母君「空しき御骸を見るく、なほおはするものと思ふがいと

ひなければ、灰になり給はんを見奉りて、今はなき人とひたふるに思ひなりなん」と、さかしう宣ひ

☆おもつ―思

○ひつ―ナシ

○のみ―ナシ

○も―ナシ

二

☆煙―けふり
○も―ナシ

☆「ひたふる」ノ「ふ」、
首書清ム。